

令和元年の総会を終えて

会長 内山 いつ

平成三十一年も数日後に「令和元年」がスタートするとき、本会の総会を開催しました。

元号の「令和」は古典で「万葉集」の梅花の歌を大宰府で花見の宴を開いた「大伴旅人」の宴の序文より選ばれたそうです。

遠い昔の日々を忍び、人々が美しい心を寄せ合う中で文化が生まれ育つことを願っております。

町内に歴史文学の著者であります「鈴木克久氏」を迎えました、「もうひとつの新撰組、伊東瀧三郎、民三郎をおつて」と題し、「講演を賜りました。

幕末の動乱の頃、新徴組の隊士として生きた方が東金市川場の人で、伊東瀧三郎と言います。「市中見回り」の役目を任い、浪士組二百五十名で組織され、後に新徴組と改名されて、柳剛流(りゆうこうりゅう)の剣術道場を開いた人物であり、江戸市中の警備を行っておりました。幕末の激動の波の中で後に庄内の山形県鶴岡の地で生涯を送り、後継ぎの民三郎

第 10 号

会長
内山 いつ

事務所
九十九里町真亀4294
電話:76-3226

会員数 52名
令和元年7月現在

設立
平成22年4月17日

は東金市川場の石川さんと結婚、明治五年に長男重松、明治八年以後、

次男繁次、長女小雪などに恵まれ、明治十六年には山形市の巡查となりましたが大正三年に六十四才の生涯を閉じております。

一方、「新撰組」隊士となった池田七三郎は本名を稗田利八(東金市田間出身)といい昭和十三年(九十才)まで生存されていたそうです。身近な郷土に生まれた人たちの幕末維新の激動の波音が聞こえてくるようです。親近感もありとても実り多いひとときでした。

今年の事業計画も承認され、活動のスタートです。同じ志をもつ同志として地域貢献に自己研鑽に心がけ、前向きに社会の一員として学び合う日々を願いながら、会員各位のご協力を期待しております。

令和元年度総会記念講演会報告

歴史小説家鈴木克久氏

「もうひとつの新撰組」

去る平成三十一年四月二十日(土)、九十九里町片貝の中央公民館において九十九里郷土研究会総会が開催されました。この総会の記念講演には、会員の強い要望により元九十九里町教育長で歴史小説家の鈴木克久氏にお願いしました。これは近年、鈴木氏が幕末

期の郷土(東金市川場)出身の新徴組隊士伊東瀧三郎についての作品『峠越え』を発表されたことによりです。

講演は、「もうひとつの新撰組」一伊東瀧三郎・民三郎を追って一という題で、作品創作のきっかけから作品の波紋について、平明に話されました。四〇名近くの出席者は、幕末の遠い話かとの予想に反して、とても身近な話ということを実感していました。その内容を配布資料の目次で紹介します。



- 1 「市中見廻り諸留」との出会い
 - 2 新徴組(浪士組)とは
 - 3 庄内(山形県)へ下った新徴組
 - 4 庄内鶴岡を訪ねて
 - 5 『峠越え』の波紋
 - 6 その後 墓の土 本住寺過去帳
- 配布資料の年表には、瀧三郎とその子民三郎の生涯が記されています。一八二六(文政九)年、瀧三郎の出生から一九一四(大正三)年、民三郎の死去まで。報告者の感想で恐縮ですが、この年表と両親祖父母の年代とを重ねますと、幕末明治が、そんなに遠い出来事ではなかったことを実感します。例えば、民三郎の長男重松は明治五年生まれ。この翌年に、片貝の文化人の中西月華や私の祖父が出生。民三郎死去の三年後、月華の末女富江さんと私の母が生まれています。

最後に講演者鈴木克久氏について簡単に触れておきます。鈴木氏は昭和十八年、片貝町（現、九十九里町片貝）の生まれ。すでに少年の頃から美術や郷土史に関心を持っていました。それが結実し、真忠組を題材にした長編小説『別れ霜—風説九十九里真忠組—』（平成二十四年、崙書房）、その続編『虎落笛—九十九里真忠組余聞—』（平成二十六年、安藤書房）を発表されています。鈴木氏は『別れ霜』のあとがきに「中学生の頃、従兄の吉田博氏に誘われて、作田川南岸にあるちっぼけな、「三浦帯刀楠音二郎墓」を見に行ったことが、「真忠組」というものを知った最初であつた」と記されています。歴史好きな少年に、郷土の歴史の与える大きな影響を思わずにはいられません。

因みに九十九里郷土研究会の創設は、もともとは、教育委員会主催の「郷土史研究会」の復活を願った鈴木氏が、教育長時代に懇談会を開催したことに由来します。（齊藤 功）

伊能忠敬親子苗字帯刀認可のこと

川島 秀臣

佐原の伊能忠敬記念館蔵の国宝文書の中に次の様な文書がある。佐原村の百姓二人が寛政十一年（一七九九）十二月、翌年一月八人が忠敬と息子景敬の功績を以て評定所に兩人に苗字帯刀を許される様箱訴（江戸評定所門前に設置された目安箱に訴状を入れること。八代將軍吉宗が実施）をして、それが認

可されたことに対する奉行所宛の謝礼状である。

差上申一札の事

津田山城守知行下総国佐原村百姓源兵衛外七人は去々年未年十二月、同村藤左衛門外七人は去甲年正月、三郎右衛門（忠敬長男景敬）、并親勘解由（忠敬）先祖より申送り相守り、村内取計等宜敷段申立、両度御箱訴仕り候二付、右の者共御呼出し御吟味これ有り、猶又三郎右衛門義も御吟味の上左の通り仰せ渡され候

一、三郎右衛門先祖天正年中佐原村へ罷越住居仕候依来代々村方為二相成候義を心掛、引続き勤ケ由義申送り相守、村内困窮人等相憐、類焼二逢候ものへ米銭食類等合力いたし、凶年又は出水等の節村内は勿論近郷迄も夫食貸渡し、或は合力いたし、貧窮ニて年貢納め難きものへは弁納の儀取計ひ、米穀払底高値の節は窮民救方の儀品々心を用ひ、都て平日村内撫育の志厚く、且三郎右衛門儀は幼少より考心ニて父の申教ニ随ひ代々申送り相守り、公儀を重じ地頭所を大切ニいたし、平日人を勞り村内貧窮ニて年貢納め難きものハ弁納いたし遣し、亦は貧家の長病人、産婦等へ手当いたし、類焼のものを勞り、且困窮ニて潰れ及ぶべきもの、又ハ荒地起返等の手当として積金の心懸等いたし、右体先祖よ

り数代申送り相守り、惣て村方為二相成候儀共常々取計候段奇特の志二付、御褒美として三郎右衛門へ御銀拾枚下置かれ、苗字は子孫迄名乗、帯刀ハ其身一代御免仰付られ勤ケ由義は御銀拾枚下置かれ苗字帯刀共其身一代御免仰付られ候

一、源兵衛外七人、藤左衛門外七人のものど

も儀は、右三郎右衛門并同人親勘ケ由奇特の取計これ有旨申立候段、神妙の義二付御褒置かれ候

右の通り仰渡され冥加至極有り難く畏奉り候、仍て御証文差上申処件の如し

寛政十三年正月廿九日 百姓 三郎右衛門 御奉行所 右同人親 当時隠居勘解由

（以下 箱訴人名等略）

寛政六年（一七九六）四十九歳で隠居して家督を長男景敬に譲り、江戸に出て幕府天文方高橋至時の門下となつた忠敬は、師の勧めもあつて蝦夷地測量、さらに各地の正確な地図作成に意欲を強める。しかし百姓の隠居では測量許可はなかなか出なかつたようだ。佐原の人々が忠敬親子の武士身分に準ずる苗字帯刀を求めて箱訴をした背景には身分を高めて測量許可を勝ち取る願がこめられていたのである。兩人が苗字帯刀を許されたのは寛政十三年（享保元年・一八〇一）一月である。時に忠敬五十六歳。幕府「御用」として全国測量の体制が整つたのであつた。

平成が終る時の感慨

染谷 佳子

いよいよ平成も終わりに近づき、新年号をあれこれ想像しながら過ごしてまいりました所、ふと思ひ出した忘れられない出来事がありました。平成十五年の五月十八日の事です。全国植樹祭の式典の折に、天皇、皇后両陛下は、九十九里の「サンライズ」に「宿泊」になり、その翌日に地引網を御覧になられ「いわし博物館」を見学にいらつしやいました。その節、私達ダイアモンドクラブ会員(老人会)の数十名は公民館にロープの張られた場所に整列をして、両陛下のお出ましになるのを待ちました。

公民館正面のドアが開き、両陛下のお姿が目前に現れた時は、美智子妃殿下のお美しさに息をのみました。皆、いつせいに感嘆の声を上げ、涙を流す人もありました。やがてお車に乗られお手を振られ去られるまで、私たちは身動きもせず立ち尽しました。

あれから十五年両陛下も御高齢となられ、いよいよ御退位も近づき淋しさと感慨ひとしおです。天変地異の多かった平成を陛下御夫妻はひたすら、被災地を訪ねられ人々に寄り添いながら祈りをささげていらつしやるお姿に深く心を打たれました。又、先の戦争の被災地も訪ねられ、戦後七十三年、戦争がなく無事に過ごせた事を心をこめて話されていらつしやいました。これから新しい時代が始まりま

石碑と父子四代の公孫樹

豊海小学校教諭 佐瀬雅彦

平成三十一年四月一日に着任した現任校は亡父の母校です。父の生家・父方の祖母の生家・母方の伯母の嫁いだ家を始めとして親戚や遠縁の家が学区にあります。ですから、創立の時代から数えると私の親族は五十人以上が豊海小学校の卒業生です。定年まで残すところ五年となった年度に我が一族に縁の深い小学校に奉職するという巡り合わせには亡き両親や先祖の導きがあつたと感じています。

校門脇にイチヨウの大樹があります。ちょうど芽吹き頃でした。そのイチヨウと並んで石碑が立っています。始めに目にした裏面に大勢の人々の名前が刻んでありました。一番右の行の私の目の高さの部分に「佐瀬榮蔵」と父方の曾祖父の名前がありました。曾祖父は幕末の文久二年(一八六二年)から昭和十五年(一九四〇年)まで生きました。亡父が豊海小学校高等科在学の頃に曾祖父から「俺は清水の次郎長と同じ時代を生きた。」と、よく聞かされていたそうです。

碑の表の前半には漢文を、後半には漢字四文字の句を漢詩のような体裁で二十八句刻んであります。後半の末尾には「西邨松齡刻」とあります。裏面には「校舍新築費寄附者氏名」(二百三十七名)、右の下の部分には当時の豊海村の村長・工事委員(二十名)・設計技師(一名)の氏名があります。両面とも一字の摩滅や損壊ありません。碑の文字は初唐の

三大家の一人の歐陽詢の代表作「九成宮醴泉銘」を思わせる起筆収筆に鋭さのある端正な楷書です。高校生の頃から書道を学んでいる私がこのような素晴らしい文字に触れる機会を得たことは、素人ながら能筆家と言われたいた祖父の導きなのかも知れません。

今年の十日間の連休を使って碑の解説に取り組みました。表は当時の山武郡長の行方幹氏の撰文で、明治人の教養の高さが伝わってきます。本文の内容は以下の通りです。当時の豊海村の人々が勤勉であつたこと。日露戦争の戦勝記念として地域の声の高まりから校舎を新築することになり、費用の半分を村民の寄附で賄つたこと。村民が学校教育に大いに期待していることなどです。

この石碑の傍らに聳え立っているイチヨウは石碑と共に

に豊海小学校の歴史を見続けてきた大樹です。イチヨウの漢名「公孫樹」は「祖父の代に植えて、孫の代に一人前になる樹木」と言う意味です。文久・慶応・明治・大正・昭和と五つの時代を生きた曾祖父の名前が刻まれている石碑を見ると、本家にある遺影の肖像画の曾祖父の顔が思い浮かびます。この公孫樹が若木だった明治後期には曾祖父は壮年で祖父は青年、成長中の昭和初期は父が学童の頃でした。大樹となった令和の現代では曾祖父の曾孫で



還暦が近づいた私が曾祖父達と同じ場所と同じ石碑を見ている。

曾祖父も見つめたりしか公孫樹の芽

準優勝甲子園の春

小沢君代

第91回選抜高校野球、平成31年3月23日開幕10年ぶり4回目の出場、習志野は創立6年目の一九六二年夏に甲子園初出場を果たしている。その偉業の陰には「甲子園が先か東大合格が先か」と生徒を鼓舞した初代校長山口久太氏の姿があった。「雑草の如く逞しく」をモットーに力を発揮することを望みます。

32校が出場12日間にわたり兵庫県西宮市の甲子園球場で行われました。県地区予選第1回戦は船橋合同チーム12-0、代表決定戦は県船橋4-3、準々決勝は千葉敬愛7-0、準決勝銚子商業6-1、県大会決勝は中央学院に敗れ悔しい思いをしています。その悔しさを胸に日々練習を積み重ね、関東大会ではベスト4という結果を残す事ができました。二人の主将を中心とした今年のチームは学年を超えて仲が良く、選手間の連携もあり「全員野球」を胸に粘り強く執念と根性で進んで行くと思います。1回戦拓大紅陵2-1、2回戦市立柏3-1、3回戦は佐倉7-0、決勝は中央学院に2-6で敗れたがでも千葉県から2チームが出場可能嬉しい事です。関東大会1回戦桐生第二(群馬県)

3-1、準々決勝東海大甲府(山梨県)8-4、準決勝桐蔭学園(神奈川県)に2-4で敗れ3月15日の出場有力には胸を踊らせて発表を待ちました。習志野のオリジナル曲「レツゴー習志野」は吹奏学部のドラム音に合わせ、タンバリンを鳴らして踊る、また陰の力の3人のマネージャーは給水ボトルを用意、グランドや部屋の掃除をしたり、合宿や試合にも同行して選手の活動を支え、寒空の下、水仕事で手があかぎれすることも、しばしばあり、でも「ありがとう」という選手の言葉に気持ちを新たにするという。

開会式後2日目、3月24日(日)、第1回

戦日章学園(宮

崎県)8-2、

初戦春1勝と

なる、初回から

7点リズムに乗

る、二番打者背

番号4、孫拓海

は「バント絶対

に決める」と打席

に入り走者を二

塁に進めた。第

2回戦28日(木)

星稜(石川県)3

1-1、全国制覇の鍵をにぎるチームでもよく

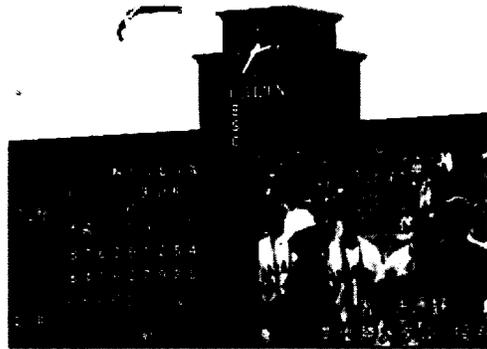
やった。第3回戦31日(日)市川和歌山(和歌

山県)4-3、第4回戦準決勝明豊(大分

県)6-4、決勝東邦(愛知県)0-6で負け

た。明豊逆転勝ち、ピッチャーも一球一球に

思いを込めキャッチャーのグローブめがけ、気



温の変化が大きい中、顔には汗、ユニホームは活躍の色、守る選手の動きには気魄と笑顔、3点を失いながらも、チエンジアップ、フオーク、スプリットと相手の打者との駆け引き、孫の打順バッターボックスに立ち、バットを短く持つて立ち「どうか一発飛ばしてほしい」と合掌、5回裏のランニングスローで守ることが出来た。打者の強振の打球を半身でとり一塁へ送球アウト、他の選手より小柄なものの小技と根性に拍手。7回表にヒットを打ち同点とした。結果を残す事ができ決勝戦となる。「走・攻・守」すべての能力のすばらしい東邦には完敗。準決勝となる感動「ありがとう」と涙をふいた。人格完成された指導者、先輩、友達に恵まれた毎日楽しく練習している姿が浮かびます。夏も頑張れ!

事務局日誌

六月二十四日(月)、二十五日(火)

サンライズ九十九里主催「文学碑めぐり」(講師：内山会長、谷川良枝)

参加者の関心が深く、岡山から来た方は「夢二の碑があるのに感激した」とのこと。

『九十九里町誌』資料集第二十五集 編集者中、十月に発行予定

木島先生のご尽力、町当局のご支援により、いよいよ発行の運びになります。二十年振りの資料集が出来上がります。

編集後記

令和になつての初めての『通信』がやっと発行することが出来ました。多くの方々からの投稿を頂きましたが、紙面の関係でカットしなければならなくなりました。掲載できなかった原稿は次号まわしになりました。ご了承下さい。